

令和 2 年 5 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02510

研究課題名(和文) アメリカ南部文学の戦後性について 戦後日本文学との比較考察

研究課題名(英文) Postwar-ness of American Southern Literature with a Comparative Perspective from Postwar Japanese Literature

研究代表者

後藤 和彦 (Goto, Kazuhiko)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：10205594

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、研究代表者がこれまで取り組んできたアメリカ南部文芸復興期の文学を「戦後文学」として見る視座を今一度反省的に検証し、これを第一次世界大戦と第二次世界大戦、さらにはヴェトナム戦争後の南部文学を分析する視座としてどの程度有効であるかを具体的な作家作品を分析しつつ検証することを目標とした。その際、日本文学批評史において、なかんずく「戦後文学」という術語は、敗戦直後かまびしく議論され、厳しい検証の目に晒されており、これを今一度申請者独自に再検討し、申請者が提起しようとする南部文学における「戦後文学」観を鍛え練り上げるために援用し、翻って両者の戦後文学観の比較を試みようとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アメリカ南部文学研究に対し、日本において特異な発展を遂げた戦後文学研究の成果の援用を試みるところに本研究の特殊性は存在する。また、南部文学を通史的に照査する、決して百科事典的なものではなく、テーマリッチな研究としては、1986年のRichard GrayによるWriting the South: Ideas of an American Region以来、目覚ましい研究成果は、管見の限り、現れていない。「戦後文学」としての南部文学、このテーマのもとに一貫した史的記述の可能性が今次研究によって一定程度開かれ、学会等を通じて公に問われ、広く認識された点を本研究成果の学術的・社会的意義と見たい。

研究成果の概要(英文)：This study proposal aimed to reconfirm the validity of my thesis I had publicized in my past academic activities--a thesis that proposes a perspective of looking at the literature of the American Southern Renaissance of the middle-1920s as a post-Civil War literature. Then I proposed to study whether my thesis could also apply to the southern literature produced after the World War II or even after the war in Viet Nam and if not, how my thesis should be elaborated or historically updated, by analyzing the literary texts produced by southern writers representing each era, in order to elucidate transformation of their "postwar-ness." I also did research on the "postwar-ness," an agendum passionately discussed among the Japanese intellectuals immediately after the defeat in the World War II, and tried to deduce from their arguments a formula of "postwar-ness" per se and to utilize the result as an index to reevaluate my understanding of the "postwar-ness" of the southern literature.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ南部文学 日本戦後文学 戦後性 敗北の文化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) この研究を始動する以前に、私は平成 21 年から 23 年度、研究課題「アメリカ南部文学におけるナショナル・ナラティブの意義——近代日本文学との比較考察」(基盤研究(C)課題番号 21520286) 引き続き平成 24 年度から 27 年度、研究課題「公的言説から文学テキストへ——アメリカ南部文学の自伝的傾向と近代日本の私小説」(基盤研究(C)課題番号 24520316) において、アメリカ南部史上、もっとも重要な歴史的指標として、19 世紀中葉の南北戦争における「民族的」敗北をとらえ、その敗北後、十数年におよぶ連邦政府による軍事的占領において、緊急かつドラスティックな文化価値の再配置を経て、その余波がその後の南部文学のテキストに及ぼした影響を、前者の研究課題にあっては、敗北後の南部人が一敗地にまみれた祖国に寄せた文化テキスト(政治・経済・宗教等多領域にわたる種々のジャンルのジャンルからなるテキスト)、文学テキストとして昇華される以前の、いわば「プレ文学テキスト」への解析を通じ、また後者にあっては、それら「プレ文学テキスト」、すなわちおおびらに対社会的なメッセージ性をはらみ、公的な性格を明瞭に与えられたテキストが、いかに文学テキストという本来私的な言説へと内向し、変容・昇華・定着してゆくか、そのプロセスへの検証を通じ考察を行ってきた。

(2) その際、いずれの研究課題においても、20 世紀中葉の第 2 次世界対戦における決定的敗戦は言うまでもなく、西欧列強国からの外圧に屈して国を開き、近世期まで列島に存在してきた政治、社会、文化における土着の「美学」一般を断念し、あわただしく近代国家の体裁を整えるにいたったいわゆる「明治維新」という歴史的経緯をも含め、近代期において計 2 度にわたって「文化の敗北」を経験してきた国として、我が国日本の事情を取り上げ、南部文学の特徴をより明確に析出するために、日本近代文学史における各時代の代表的文学テキストを同じく「敗北の文化」の所産であると見なし比較対象としてきた。

(3) つまり、私は文化不毛の地といわれたアメリカ南部が 20 世紀第 1 四半世紀に爆発的な文学の開花をむかえたいわゆる「南部文芸復興期」の文学がある、あるいはそれ以降の文学に関して留保付きながら、すべて 19 世紀中葉の南北戦争の敗戦後の余波から、あるいは「敗北の文化」から生まれ出た文学であると主張してきたのであり、すなわち同文学が一貫して「戦後文学」の地平にあることを分析してきたことになる。

2. 研究の目的

(1) 上記 1 の観点に立てば、おのずと問われるべき問題が浮上して来ずにはいない。「戦後文学」というときの「戦後」とはいつ終わるのか、終わるものなのだとすればそれはいつ終わるのかという、つまり「戦後文学」の射程の問題である。この問いは、奴隷制度という生活全般の基盤をなす制度を失った南北戦争後のアメリカ南部にも比肩しうるような形で、徹底的な敗戦後における価値の転倒を経験し、したがって「戦後文学とは何か? どのようなべきか?」というそれぞれ熱烈なる主張とそれらに対する熾烈な検証を経てきたような日本の戦後文学者らにインテレクチュアルたちにとって、応答困難な、かつまた応答必須の問いをであったようだ。たとえば日本には第二次大戦後から 70 年台中葉の村上龍の登場まで、わずか 30 年ほどの時間について、2 段組 550 ページに及ぶ、3 名の著名な文芸評論家による戦後文学研究の大著がある。アメリカ南部にはこれに比肩するものは言うまでもなく、これに類する著作も、管見の限りではあるものの、存在しない。しかし、一方で、巷間、「戦後文学は石原慎太郎による 1955 年の『太陽の季節』をもって終わった」とあまりに性急に、しかしなお一定の説得力をもって論ぜられ、実際、「もはや戦後ではない」がマスメディア標語となったのは翌 1956 年、敗戦からわずか 10 年目のことでもあった。

(2) その前年の 1955 年は、ノーベル文学賞を受賞後のフォークナーが来日し、若い日本の文学者・文学研究者たちのために、「新しい日本の文学は私の南部文学と同じ戦後文学としての宿命を共有するだろう」といった驚くべき言葉を手向けた年でもある。彼のいう「戦後文学」は、単に時間的に戦争の後の文学といったものでないの言うまでもなく、だとすれば、南部に敗北をもたらした南北戦争から「戦後文学」としての彼の文学が最高潮に達した 1930 年台までに実に 65 年、この日本での発言までほとんど 1 世紀を閲する時間が経過していることになる。同じく大敗北を喫した「国」同士、日本とアメリカ南部にあって、なぜこれほどまでに「戦後」の射程が異なるかといった事情が出来しうるのか。南部精神史の泰斗 Fred Hobson には 1991 年刊の著作 *The Southern Writers in the Postmodern World* があり、ここには当時最新の、ということとはつまりベトナム戦争を経過したのちの南部文学者たちが取り上げられ吟味され、それぞれに革新性と保守性を分有していることが明らかにされるのだが、もっともそこで印象的なのはミシシッピの小説家 Barry Hannah による小説 *Ray* (1980) で、ベトナム帰還兵の戦時の悪夢が南北戦争の戦闘と対比的に、かつまたそれが時空を超えて地続きであるかのように描かれている。さてこれは果たしてポストモダン期南部文学の旗手たちが南部文芸復興期文学における文学的技術革新の相続者であることを単に意味するのだろうか、それともフォークナーら南部文芸復興を可能にした南部の息の長い「戦後性」がさらにその命脈を継がれ続けていると見ればよいのか。

(3) さて昨今、我が国においても、加藤典洋の『敗戦後論』(1997) の流れを汲みつつこれを過激化したような白井聡の『永続敗戦論』(2013) が上梓され好評を博するといった事態を我々は目の当たりにしている。ならば、日本文学における「戦後性」の水脈も、石原慎太郎をもって、あるいは同じく『戦後日本文学史・年表』の別の書き手である秋山駿が述べるように村上龍をもってついに行き場を失ったのでも、枯渇したのでもなく、間欠泉のごとく、忘れたところに定期的

に噴出する伏流水のごときものをなしていると思われるべきではないか。「戦後」とは敗北を経験したそれぞれの国の文学にとって「抑圧回帰」と呼ぶべき何ものかではないか……こうした問題群を様々に検討し整理することが本研究の第一目標であった。

3. 研究の方法

アメリカ南部文学を「戦後文学」という観点にたち、日本において戦後文学の戦後性という問題規制について積み重ねられてきた重厚な研究成果を援用しつつ、歴史的記述を行うことを今次研究の最終目標としたため、私がこれまで蓄積してきた「敗北の文化」を視座とする南部文学の歴史的考察を、今一度今次研究の目的に応じて再整理ならびに再点検し、アメリカ各地に散在する南部文学ならびに文化研究の拠点でのさらなる関係資料の発掘・蒐集、またこの領域に功績をあげてきた研究者たちとの交流・協働を経つつ、以下に記すように各年度ごとに具体的な4段階を設定し、効率的に作業を進捗させることとした。

(1) 第1年目となる平成28年度には、(a)アメリカ南部文芸復興期の文学を南北戦争後の「戦後文学」として見る視座の再点検 (b) 日本のいわゆる「戦後文学」研究の実績の再整理、加うるにその「戦後性」、すなわち「戦後の歴史的・文学的意味」に関する作業フォーミュラの提起、以上、今次研究上の理論的な枠組みにあたる2段階について並行的に進行することとした。

(2) 2年目以降については、1年目に暫定的に獲得できた「戦後性」の定式が、南北戦争以後からポストモダン期にいたるまでの南部文学を縦断的に歴史記述する際のテーマとして、どの程度有効であるか、時代時代を画すると目される文学者ならびに文学作品に具体的に適用し、無論、その都度、「戦後性」という定義の論理的妥当性に立ち返り、必要な修正を加えることとした。平成29年度については、南北戦争集結から19世紀末の時期を対象とし、申請者が南部の敗北以後の最初の自覚的(とはすなわち「戦後」的という意味だが)南部作家とみなす Mark Twain の文学を主たる分析対象としてとりあげることとした。

(3) 研究第3年目にあたる平成30年度は、第一次大戦後のアメリカ文学のモダニズム全盛期にあって、モダニズムの技術革新とその背後にある T. S. Eliot の *The Waste Land* にその顕著な表現を見出す都会型孤立の精神を受け継ぎつつ、家族とその土地にまわりつく敗北の閱歴に対する嫌悪と執着をあわせもつ William Faulkner, Thomas Wolfe などを対象とした。

(4) 最終の第4年目は順序からして20世紀中葉以降の文学を対象とした。この時期にはベトナム戦争におけるアメリカ国家としての一種の敗北経験が差し挟まれ、南部史家 C. Vann Woodward は、ベトナムの「敗北」を経てアメリカは初めて南部に比肩する経験を積むことになると言ったが、ベトナム体験が南北戦争後に出来た土地の規約の破壊、内在の美学の断絶と新しい外部由来の親しみのない新美学への転轍といった事態を果たしてともなったか、申請者には疑問の余地なしとはしない。いずれにせよこの時期については、先に触れたバリー・ハナの事例に見られるような、ふたつの「敗北」における精神的震度の相違を問題とする南部作家たちを対象に据えることとした。

4. 研究成果

(1) 研究期間4カ年を通じて、日本のいわゆる「戦後文学論争」をひとあたり概観できたことそれ自体がこの研究の成果のひとつとも見なせると思うのだが、それを今一度概括すれば、まず日本では、いわゆる「戦後文学」の担い手のわずかな年齢差によって実に細かい世代分類がなされていることがあり、このような執拗なまでに微細な時代区分は、この時代がそれだけめまぐるしく、つまり、終戦10年をもって戦後文学が一定の命脈を終えるといった考えがまかりとおる程度に性急に急展開していったことを意味するだろうし、同時に日本の知識階層を一斉に浮足立たせるほど、敗戦が日本人の精神に及ぼした深甚な影響を思うべきところだろう。戦後まもなく野間宏、椎名麟三、武田泰淳ら戦前には名を知られていなかった新しい文学者たちが「戦後派」を名乗って登場してきたとき、文学界は「政治と文学」をめぐる論争に突入する。すなわち、一方に国を荒廃に導いた第一の原因は明治以来の日本の近代化の未了にあるとし、戦後文学とは民主主義の政治理念の表現であるのを枢要と見なす共産党系の政治派(中野重治、宮本百合子など)これに対し政治理念と文学との直接癒着現象に対する懐疑と反措定を表明した『近代文学』同人ら文学派(平野謙、荒正人など)との論争である。直後、いわゆる「戦後派」文学者たちの文学を指して「戦後文学は、転向者または戦争傍観者の文学である」とおもむろに斬りかかり、みずから皇国のために命を捧ぐ生き方の完全な正当性を信じていた過去をもつ「戦中派」として、吉本隆明が文学界に名乗りを上げ、やがて鶴見俊輔によって包括的に考察されることとなる「転向」という、おそらく申請者が戦後文学観を形成する上でもっとも重要となる問題規制が提出される。

(2) 日本の戦後文学論争の核心に存在すると思われる「転向」というアジェンダを含め、複雑に展開した同論争の推移を具体的に横目に見据えつつ、上記したような段階を踏んで南北戦争敗戦の直後、19世紀の後半期の南部文学から、20世紀中葉以降、すなわちベトナム戦争後の南部文学に至るまで、おのおのの時代を代表する作家たちの文学テキストの歴史的展開を分析したところ、やはり事前の予想のとおり、そこには看過し難い相違が析出されることとなった。南部にとっても日本にとってもその文学的成果にとっておのおのの文化的敗北が決定的な要因であることは明らかなのだが、踏み越えることを外部から強制され、「戦後」の時空にあっては「正義」や「真理」としての価値を失墜したかつての土着の美学に寄せる思い、あるいはそのようなもはや知的な命脈を断たれてしまった旧美学を時代錯誤的に信奉し場合によっては行動に実践しようとするものに対する許容度は、いずれも「敗北の文化」圏内にあるはずのアメリカ南

部と近代日本（あるいは特に戦後日本）にあって著しく違っているように見える。戦後日本社会にあって、特に知識人たちの戦前から戦後にかけての「転向」が、かなりの強度をもった倫理的問題として取り上げられ多くの真剣な研究に付されてきたことが何よりこのことの証左であろう。

（3）4年の研究期間を通じて到達したこうした知見を基盤としつつその都度その都度の成果を、研究期間中に各種の学会での講演や研究発表を通じて公に問い、あるいは研究論文として様々な媒体に発表することができた。また、この研究期間を通じて、これまで研究遂行上見落としていたいくつかの点について私を啓蒙してくれたすぐれた研究業績をもつ国内外の研究者たちとの知見を得ることができ、また新たな研究テーマの手がかりを得ることもできた。新しい研究テーマについては、すでに科研費基盤研究として今年度中に申請を完了し、先ごろ新たに4カ年の研究遂行の予算も認可がされたことは誠に幸いであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 後藤和彦	4. 巻 記載なし
2. 論文標題 概観2017年「アメリカ文学」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文藝年鑑	6. 最初と最後の頁 69-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Goto Kazuhiko	4. 巻 -
2. 論文標題 Postwar Japanese Novelists and American Literature	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Oxford Research Encyclopedia of Literature (net)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/acrefore/9780190201098.013.204	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 後藤和彦	4. 巻 記載なし
2. 論文標題 概観2018年「アメリカ文学」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文藝年鑑	6. 最初と最後の頁 76-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 後藤和彦
2. 発表標題 再見アメリカの影 戦後文学とアメリカ小説について
3. 学会等名 第44回中四国アメリカ文学学会大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 後藤和彦
2. 発表標題 アメリカ・南部・文学
3. 学会等名 第70回九州アメリカ文学会大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 後藤和彦
2. 発表標題 戦後文学と英語の問題（シンポジウム「英文学と日本語」司会および講師）
3. 学会等名 第15回日本英文学会関東支部大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 花岡 秀（監修）、藤平 育子・中 良子（編）、千葉淳平、上西鉄雄、新田啓子、田中久男、松岡信哉、大知真介、坂根隆広、舌津智之、諏訪部浩一、後藤和彦、千石英世、平石貴樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 374
3. 書名 フォークナー文学の水脈	

1. 著者名 日本英文学会（関東支部）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 334
3. 書名 教室の英文学（分担執筆）	

1. 著者名 トマス・ウルフ、大沢 衛	4. 発行年 2017年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 528
3. 書名 天使よ故郷を見よ 下 (解説執筆)	

1. 著者名 アメリカ学会、松本 悠子、久保 文明、遠藤 泰生	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 960
3. 書名 アメリカ文化事典 (編集および項目執筆)	

1. 著者名 諏訪部 浩一・日本ウィリアム・フォークナー協会(編)、新田啓子、小林久美子、後藤和彦、阿部公彦、大地真介、竹内理矢、笹田直人、金澤 哲、クリストファー・リーガー/重迫和美訳、藤平育子、花岡 秀、田中敬子、千石英世、中野学而、大橋健三郎/平石貴樹訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松柏社	5. 総ページ数 448
3. 書名 フォークナーと日本文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----